

言葉一つの捉え方 高齢者の抱える不安への寄り添い

16CC04 大野 結希

I. はじめに

日本の高齢者の割合が増えている、介護老人福祉施設の役割の更なる明確化が必要であると思われる。介護老人福祉施設は、入所の方が有する能力に応じた自立した日常生活を営むことができるようにすることを目指さなくてはならない場所である。介護老人福祉施設では、入所の方が有する能力に応じた自立した日常生活を営むことができるようにすることを目指さなくてはならない場所である。

私が担当させて頂いたA様は、座席の関係から一人で座られている方というのが印象的であり、この方の一日をより充実したものにする一助となれたらと思ひ、A様を受け持ち利用者様とし、介護計画を実施した。

自立という観点から、A様ご自身の力で移動を可能にすることと、一日の余暇時間の使い方に多様性を持たせることを課題、目標として挙げ、支援の実施を行った。その中で言葉の受け取り方、支援をする根底となる心の持ち方、生活に寄り添うという介護福祉士の特性などの沢山の学びを得ることが出来た。それらを事例の事柄を踏まえて以下にて報告する。

II. 実習先種別・実習期間

介護老人福祉施設

2017年6月26日～7月28日（うち23日間）

III. 事例紹介

A様 80歳代 女性

1. 家族構成及び生活歴

東京生まれで、4人姉妹の長女であり、キーパーソンは東京在住の妹様。

短大卒業後、保母として働き、その後神学校に進まれる。

教会の牧師をしながら、幼稚園の園長を務め、海外で現地の子供に日本語を教えるボランティア活動もされていた。

入所前はケアハウス〇〇施設で生活していたが、歩行器のブレーキのかけ忘れにより、転倒が多くなってきていた。

2. 入所に至った理由

要介護度の上昇が見られたのだが、職員からのケアは一部除いて拒否されており、認知症の進行により他の方とのトラブルが多くなって来ていたこともあり、入所へと至った。

3. 健康状態

疾患：アルツハイマー型認知症。慢性腎不全。高血圧症。

4. 日常生活の状況

(1)移動

- ・車椅子移動の全介助で、ベッドから車椅子への移動も全介助になっている。
- ・立位は手すりに掴まることで可能だが、痛みの訴えにより立位保持を2人で行うこともある。

(2)身支度

- ・着脱は全介助であり、衣服の自己選択も行われていない。

(3)食事

- ・箸、スプーンを使つての自力摂取されている状態である。
- ・食事形態は常食であり、水分摂取は1日500ml～750mlほど。
- ・元々少食なことと、食べる速度がゆっくりであり、完食前に満腹感を感じてしまっている。

(4)排泄

- ・定時のトイレ誘導が行われていることと、尿意、便意の訴えの際にトイレ誘導を行っている。
- ・普段オムツ、パッドの着用をされている。
- ・便秘気味であり下剤の服用による、排便コントロールが行われている。

- ・夜間はベッド上でオムツ、パッドの交換が行われている。

(5)入浴、清潔保持

- ・個浴で全介助が行われている。
- ・着脱も全介助で行われている。
- ・週2日、月曜日と木曜日に入浴日が設定されている。

(6)コミュニケーション

- ・話すことが好きであり、聴力はしっかりされている。
- ・ほかの利用者の方に厳しい言葉をぶつけたことがある。

5. 性格

穏やかで理知的な一面と、人に厳しく当たられる一面がある。

感情の起伏は日毎で異なる。

6. 1日の過ごし方

- ・臥床時と排泄時、入浴時、行事の時以外は基本的に自分の定位置から動かれ行事への参加は、職員の方からの呼びかけにより消極的参加をされている。
- ・定位置から動かれることはなく、その日の体調によっては日中にベッドで休まれることもある。

IV. 介護の実際

1. 課題の発見と分析

手を動かされることが少なく、痛みを訴えられることがあるが、要因に疾患はなく、手を動かすことも可能。また間接可動域の観点から見ても、車椅子のハンドリムに手は届くため、車椅子の自走を可能とするためにも、手の活動を増やしていくことが必要であると考えられる。

また日中活動が少ないと感じた為、一日の選択の幅を広げることが必要であると感じた。

2. 介護上の課題

利用者の方の手の痛みの訴えを聞き、配慮を重ねて活動の実施を行っていく。

できる活動を増やすために、段階を踏んで活動を行っていく。

3. 介護目標

長期目標：一日のQOLを向上させる

全体として一日のQOLの向上を目指し、A様ご自身の力で車椅子を自操していただく事ができる。

短期目標：手の痛みと向き合いつつ手指を使った活動を行うことができる

A様の手の痛みの理解をするとともに、無理のない範囲で手を使った活動を増やす必要があるという課題をあげ、手の痛みと向き合いつつ、手指を使った活動を行うことができるという短期目標を設定した。またこの目標の達成に向けての支援の中で、さらなるADLの可能性が見られるのではないかと感じた。

V. 実施及び結果

まず初めに、A様が体調を崩されたことにより支援の見直しとなったため、十分な実施結果には至らなかった。しかしその実施できた期間の中で、わかったこととして、A様は日常生活の中で自発的な手の活動が少ないと感じた。A様が日常生活の中で手を動かされる機会は、トイレ誘導時の手すりに掴まさせていただく際と、食事の時だけであり、手を机の高さより上に出すことは少なく、膝の上や腿の下から動かされることがない。動かさないことにより起こりうる廃用症候群の予防のため、手に焦点を絞った身体機能の維持、向上を目指した。実際に様々なアプローチを行っていき動かさせていただく中で、A様の手の可動域は広く、車椅子の自走への展望も見えてきたように思えた。

まずは段階を踏んで手を机の上に出していただくことを最初の目標として支援の実施をした。膝の上、腿の下に手を置いている理由が、空調の影響で寒くなっており、手が冷えていることに要因があると気がつき、手を温めるためとして私が手を握ることで手を伸ばしていただけるようになってきた。他のアプローチでは手を出すことを渋られることも多かったが、手を温めるためというアプローチではA様が笑顔で手を差し出してくれる姿も見られた。手を出していた

だけようになってきた後には、簡単な手の体操を行っていき、少しずつ手を動かす段階となった。しかしこの頃から手の痛みの訴えが多く見られるようになってきており、実施も難航した。

そんな時、日常を見守っていく中で、A様の「痛い」という発言が、痛みによる訴えだけではないのではないかと考えるようになってきた。トイレ誘導時、車椅子から便器への移乗の際に立位をとっていただくのだが、その際にも「痛い」という言葉が頻繁に発せられており、ほかに不安を訴えられるときの「怖い」と言われるときと同じ感情、表情を言葉の中に感じた。他にも活動を開始する時、支援を実施する時に「痛い」と言われることが多く、「痛いから難しい」、「痛いから今は良い」などが多く、これらのことからA様が痛み以外の、ほかの要因により「痛い」と言われているのではないかと考えるようになってきた。

VI. 考察

この事例の中で、本当に沢山のことを学んだが、さらに深められると思った点としてA様の「痛い」という言葉の意味を捉える部分がある。実施していく中で感じた通りに、A様の「痛い」という言葉に不安や恐れの意味合いがあるとすれば、その部分に対しての更なる理解と支援の提供が必要だったと思うからだ。痛みの訴えがあった状態で支援の実施をすることは、利用者の方の意思を蔑ろにしていると思う。そして、もし不安や恐れなどの感情をA様が持っているのであれば、行う実施の効果というものはあまり得られないと思うのだ。

指導者様から手指を使った活動を行う上でのアドバイスとして、タクティールケアの存在を教わった。その時は痛みの訴えがあった時の解決策としてスキンシップという形での活用であったのだが、このような不安解消の為の支援を日常の支援の中で行うことで、更なる支援の可能性が考えられるのではないかとと思う。実際にA様の生活に関わり、触れ合っている活動をしている中では「痛い」といわれることは少なかったように思うからである。

木本は、高齢者の孤独感や不安感を受け止めるケアとしてタクティールケアの有用性をあげている。¹⁾ 高齢期は、自分自身の人生を振り返るなど、円熟の時期として重要な意味合いを持つ。そして同時にライフサイクルの、他の時期に比べて孤独で不安な状況になりやすい時期であり、その高齢者の抱える不安へのケアというものは存外に少ないと告げている。

介護福祉士の日常生活の中での支援は多岐にわたるが、その日常生活の支援の中で高齢者の癒しを主軸目的として“触れる”ことは少ないように感じる。そもそも癒しを目的として人に触れるという認識自体が、私の中で薄かったように介護に関わる方々でもこれは同じことが言えるのではないかとと思われる。

高齢者の孤独や不安感を受け止める非言語的なコミュニケーション方法のひとつとして、タクティールケアが有効であるとすれば、このケアを普段から利用者の生活に寄り添う介護福祉士が行うことで、さらなる信頼感へと繋げていくことにも大きく役立つと考えられる。

これらのことからA様の「痛い」という言葉が、私の感じたとおりに不安感や孤独感に起因するものなのであれば、今回学んだタクティールケアなどの不安の緩和に繋がるケアを実施していくことで、A様の不安な感情からくる「痛い」という訴えにも適切な支援が出来るようになる。不安を取り除く、あるいは緩和させることができたなら、さらなる信頼関係を築くこともでき、A様の日常生活の中での安心感を増すことにも繋がる。そうすることで、A様に対しての支援もより受け入れてもらいやすくなり、A様自身も生活に意欲を持っていただけたらと考える。

介護過程を立て実施をしていく中で、利用者の方の意欲を伴った支援の実施は、より大きな意味合いを持ち、A様の生活を豊かにすることに繋がるのではないかと考えるからだ。

VII. おわりに

この事例を通して言葉をそのまま捉えることだけでなく、柔軟に多角的に捉えるということ。利用者の方と関わっていく中で、関わる側である私自身がどういう心持でその方と関わるかで、介護支援の提供、介護計画の作成に大きな差異が生じていくこと。日頃から利用者の方の日常生活に寄り添っていくことで、新しい発見に気が付けたこと。これら3つの学びと経験を得ることが出来た。そしてこれらは実習の中心に常に受け持ち利用者のA様がいたことが大きく影響してきていると感じる。実際に、注意深く利用者の方と関わる事が出来たからこそ、得られた気付きも数多くある。そして同時に、考察で述べたことを知識として持っていたならば、より深い介護過程の展開が出来たのではないかとと思う。

この実習の中で学んだ内容、印象に残った事例は他にも沢山あり、私自身が成長する糧となったものが非常に沢山詰まっている。それらを心に留め、次のステージで私が介護福祉士として利用者の方と関わる際に、ここでの学びを生かしていけたらと思う。

参考・引用文献

- 1) 木本 明恵 (2016) はじめてのタクティールケア 日本看護協会出版会